

# 文字の効用

— L. ハーンと宮沢賢治 —

西 成 彦

文字文芸ばかりが文芸ではない。文字文芸以前にも、文芸は存在したし、それはおもに口承形式をとることによって、その伝統を後世に送りとどけてきた。また、文字の導入以降も、オーラルな伝承形式は、韻文世界・散文世界を問わず、文芸の発展に感化をおよぼしつつけている。

このことの全体を問うことは、私の手に余ることなので、ここでは、文字文芸の中に「引用」された「文盲」たち — 私は、多少差別的なひびきを持つとはいえ、文字に回収されない言語表現を歴史的に担ってきた存在を、こう「文盲」illiterate と呼び習わしたい誘惑からなかなか自由になれない — の言語活動、さらには「文盲」たちの日常生活に時として介入することになった文字の魔術的効用、この二点に絞って、今日のみなさんの議論に参加したいと思う。

そこで、みなさんもよくご存知の作品の中から二つを取りあげる。

「耳なし芳一」は、かつては非文学に属していた説話が江戸時代に怪談本として集められ、さらにそれを下敷きにしたラフカディオ・ハーンの再話を通して、昭和以降、広く知られるようになった話。

「注文の多い料理店」は、一九二〇年代に書かれた宮沢賢治童話の傑作のひとつ。

江戸時代の怪談本の中の「耳キレ」物語も、明治の英語作家ハーンによる再話も、また宮沢賢治生前唯一の童話集『注文の多い料理店』も、それぞれが文字によって書かれ、しかも文字文芸ならではのさまざまな技法を凝らして書き残された、すぐれて「文学」的な作品である。文字文芸と非文字文芸の真の衝突をここに見るといっても、それはあくまでも文字文芸の側から非文字文芸の影を覗き見るかっこうにしかならないが、それはしかたがない。

しかし、私がここに取り上げる作品は、この意味において、とりわけ選ばれた作品なのである。というのも、これらの作品は、「文盲」の側から見た「文字世界」の異

形性を、すぐれて特徴的な形で「引用」し、まさにそのことによって文字文芸の相対化をおこなった作品だからだ。

文字文芸が文字ばかりか、声を「引用」することは珍しいことではない。しかし、あるときには文字使用者と競合しあい、しかも共生する道を選ぶしかなかった「文盲」が、時として文字を「引用」し、またその効用を語りもし、場合によっては、みずからもまた文字の効用を試してみようと、その実験に手（場合によっては耳や口）を染めなければならなかったということ。要するに、ここにとりあげる作品群は、文字文芸と非文字文芸の境界上に位置し、しかも血なまぐさい衝突のドラマをさえ語ってしまったテキストとして、私が故意に選び取ったものである。

以下の論は『ラフカディオ・ハーンの耳』および『森のゲリラ 宮沢賢治』の中で私がここ数年間に示してきた論をふまえたものであるが、この二作のあいだに橋をわたす試みとして、自分では考えている。

「耳なし芳一」は、学識者の僧侶が、対する盲目の琵琶法師を平家の亡霊から救済する話、要するにエクソシストの物語である。僧侶は庶民から尊敬されている。それもこれも、彼が特権的な文字能力を持つからこそ、彼は周囲から信望を得ているのである。その文字教養の中には当然「般若心経」も含まれていて、「色即是空」「空即是色」に続く「無眼耳鼻舌心意」という呪文が、最終的には芳一の救済を可能にする。少なくとも文字教養を持つ今日の私たちに、このトリックは一目瞭然である。

しかし、芳一にとってはどうだっただろうか？ 彼にとって「般若心経」とは、ただの筆のタッチ、ほとんどくすぐりにも近い身体的な刺激以外のなにものでもなかった。琵琶の名手としての芳一は、一方で平家の亡霊たちによって暴力的に誘拐され、一方で寺の住職やその弟子たちから衣をはがれ、筆による愛撫を受ける。そして、最後に、音楽を趣味として愛好する僧侶と、音楽なしには精神の健全を維持できない音楽中毒者のような亡霊たちのあいだに板ばさみになって、芳一は血なまぐさい惨劇にまきこまれるのである。特権的・魔術的な文字使用者である僧侶と文盲の芳一とが同じ寺の中で暮らしはじめたことが、それまで琵琶法師と平家の亡霊たちのあいだに緊密なつながりを与えていた「癒す－癒される」関係を破綻させてしまうのである。

じつは「耳なし芳一」を始めとする「耳キレ」の物語一般をとりあげながら、柳田国男は、この種の物語の担い手は盲僧・座頭であったに違いないと、『一目小僧その他』の中のエッセイの中で仮説を立てている。彼らは神社仏閣の本地を説き、神仏のもたらす御利益を説きながら、なかば寺や神社に寄生しながら、同時に、その財政

(もしくは経営)に奉仕する役割を果たしていた。そして彼らはまた同時に、庶民のあいだに、ハンディキャップを背負ったひとびとに対する同情と憐憫、さらには彼らを「来訪神」とさえみなすような心性をうえつけることによって、信仰心を目覚めさせる唱導的・啓蒙的な役割を果たしていた。

明治以前の日本において、座頭も庶民も、ともに「般若心経」の何たるかを一目で把握できるような文字教養とは無縁であった。にもかかわらず、というよりはだからこそ、彼ら盲僧・座頭は、仏教の呪術的な力に帰依する民衆的な宗教心の教師たりえた。こうした「文盲」の文化的役割が社会内に定着していたからこそ、この種の物語が成立しえたのだということ。柳田国男の仮説を支持しておきたい。

一方、ハーンが日本に来たのは一八九〇年。三九歳の時であった。そして、その目の前から「古い日本」はみるみる消えていく途上にあった。自身もまた半盲であったハーンは、明治の琵琶法師が職業を奪われ、逆に、形ばかりの行政的な保護を受けるだけの存在へと零落していくのを目の当たりにすることになる。ハンセン病患者や、乞食たちと同じように。

文盲率は低下し、識字率は向上し、非文字文化は文字教養を基礎においた近代文字文化によって、圧倒されていく。その一方で、もっぱら情報伝達的手段としての功利性ばかりが強調される運命にあった近代の文字は、かつての魔力を失い、芳一の耳を除いた全身にくまなく写された「般若心経」も、もはやかつての「般若心経」ではなくなっていく。

今日、写経の習慣は、日本人全体に開かれた精神修行のひとつとなっている。また私たちは難なく活字メディアを通して「般若心経」の本文に目で触れることができ、それどころかその入門書さえも次から次へと買いあさって読むことができる。つまり、「般若心経」は目で読むことによって、ひとりひとりの読み手が自分自身の心を癒すことのできる狭義の「文学」のひとつに今日では高められているのだとも言える。

そんななかで、「耳なし芳一」を読む読者は、「般若心経」を肌で読み、感じる芳一の身体性に接近できるまたとない機会を得るのである。「耳なし芳一」は前近代の「文盲」の身体に現代人が触れうる選ばれた文献だと言うことができる。

それでは、かつての「文盲」たちの言語感覚は、近代以降、どのような形で「文学」の中に書き留められていったらう？

その例として、次に、宮沢賢治の「注文の多い料理店」を見てみよう。

「注文の多い料理店」の最後で、東京の紳士二人は、森の中の「西洋料理店」から命からがら逃げ出してくるのだが、彼らは山猫の正体にぎりぎりになるまで気づかない。「注文の多い料理店」ということばの二重性が目を欺く効果を発揮するのであるが、逆に「さあさあおなかにおはいりください」の「おなか」の両義性が山猫の貪欲な正体を明かして、山猫の計画は未遂に終わるのである。

ただ、ここで忘れてはならないことがある。ここでの山猫は、もはや獐猛な肉食獣ではない。山猫は日本語を話し、ある程度まではそれを書き、それどころか英語まで駆使してレストランの看板が書ける。無学とはいっても、背伸びを承知で文字能力を誇示しようとするほどの、じつに「ハイカラ」な存在なのである。しかも、その嗜好は、食欲の域をこえて、グルメの域に達し、舶来料理の方法を真似て、紳士二人を「サラダ」にしようとするほどである。これは植民地主義に屈する運命にあった森の動物たちによる、植民者たちへの復讐、しかも植民者たちの舶来思考・英語かぶれをそのままなぞるような文化の横領をもかねた偽装的な復讐なのである。

素人狩猟家の紳士二人もまた外国かぶれにすぎないが、山猫とその子分たちは、「洗練」「文明」「ハイカラ」を装う「野蛮」だという点で大差ない。

ここで想起しないではおれないのが、フランス革命の直後に、その精神に共鳴し、革命を起こし、しまいには地球初の黒人国家を建国したサン・ドマング（ハイチ）の革命家たちである。デーヴィスさんの講演でも名前のあがったトリニダード出身の歴史家・革命家・エッセイスト、C・L・R・ジェイムズのいわゆる「ブラック・ジャコバン」たちには、もっぱらクレオール語で奴隷蜂起の夢を語り、奴隷階級の自立をうながした魔術的煽動家マッカンドル（革命前に火刑）から、ホテルのウェ이터をしながらフランス語を覚えたクリストフ（後のハイチ皇帝）、さらには、アフリカでは部族の長であった奴隷に売られた父の子として、フランス人植民者から比較的丁重に扱われ、知的能力を買われて、白人と同じ自由と教育を受けた革命指導者トゥサン・ルヴェルチュールまで、さまざまなアフリカ系旧奴隷が含まれていた。このことを念頭に置きながら「注文の多い料理店」を読むならば、つけ刃の日本語・英語で、東京の猟師二人を料理しようと企んだ山猫とその一味は、まさに「ブラック・ジャコバン」のある種のタイプ（上記の例で言えばクリストフ）に属する。

文字は、「文盲」を差別するための指標であると同時に、逆に、「文盲」がみずから武装しようというときの武器にもいつでも転じうる。彼らは文字能力を期待されていないがゆえに、かえって難なく文字所有者を欺き、「おとり」としての文字使用に

よって、旧体制を転覆しうる。革命とは、多くの場合、実際に、元「文盲」による文字の横領・奪取・濫用なのである。そして、武器としての文字の力に習熟した「文盲」たちを前にして、ただの文字使用者は手も足も出ない。

今日の日本において、江戸時代の怪談本が描いたような学者と無学者の相互依存関係というのは成立しにくくなっている。植民地支配の被支配者となった森の動物たちは、「野蛮」の誇りを受けることを恐れず、しかも文明開化をみずからもまた装うことによってしかみずからを解放することはできない。「フランドン農学校の豚」という作品の中で、宮沢賢治は、日本語のわかる、つまり話のわかる家畜の豚に対して、「死亡承諾書」なる書類に捺印させるという場面を描いているが、まさに動物たちにまで文字能力が要求される時代に、動物たちはけっしてやすやすとは文字所有者たちの支配を受け入れるわけではなく、むしろ人間たちの期待する擬人法に対して、彼らは彼らなりの擬人法をもって挑戦的に応答するのだ。

体制に順応するか、でなければ陰謀を企むか。

近代的な社会体制の中で忠実な市民たるか、はたまた逆説的に文明開化された野蛮を演じるか。いずれしか道がないのが、近代なのである。

生き残るために芳一が流さなければならなかった血。

幸運にも流さずにはすまされたものの、まかりまちがえば山猫の餌食になっていたかも知れない東京の狩人たちの血。

この二つの血のことを、文字文献は、日本語や英語の力を借りて、確実に遺産として日本文学史の中に引きとどめている。

近代教育による識字率の上昇（文盲率の低下）は現実としても、「文盲」的な文字恐怖・文字崇拜・文字体験は、私たちの記憶の中に深く刻み込まれ、これからもこれらの記憶は再三私たちのあいだに呼び覚まされることであろう。

文字の効用はかならずしも過去を記録することにだけあるわけではないことを、まさに失われつつある過去の記録を意図する文字文献が、越境的に語っているテキスト——「耳なし芳一」と「注文の多い料理店」とはそのようなテキストであった。

かつて非文字文芸が文字を決してあなどることがなかったように、文字教養に支えられた文字使用者たちもまた、非文字文芸、およびその担い手であった「文盲」たちに対して、十分な敬意を払おうと思えば払うことができたし、これからもそうであろうということ。

昨日と今日のデイヴィスさんの話を聞きながら、また同僚たちの今日の報告を聞き

ながら、「語ること」と「書くこと」、さらには「知的な表現行為としての書くこと」と「呪術的な造形行為としての書くこと」のあいだの差異、さらにはそういったズレのあいだを越境し横断する「コード・スイッチング」のダイナミズムからなりたっている文芸の世界の構造について、あらためて再確認した。